

2017 年度 日米豪平和教育プログラム

グローバルビューの読者の皆様、こんにちは。私は LE コース 12 期生の嶺岸菜音です。現在、私は秋田にある国際教養大学に在籍しています。今回は私が高校 3 年時に参加し、今年の 12 月に日本でも開催されます、「日米豪平和プログラム」についてお話をさせていただきます。

はじめに、「日米豪平和プログラム」をご存じではない方のために、簡単に活動内容を説明します。「日米豪平和プログラム」とはオーストラリアの海洋博物館を中心に 2017 年から始まった、オーストラリア、アメリカ、そして日本の高校生達のための平和教育です。各国の高校生達は、毎年与えられたテーマのもとで自分たちの住んでいる地域の戦争の歴史について調査をし、そこから戦争や平和への考えを深め、動画、パネル（横断幕）などの様々な形によって後世に残したい戦争の記録や平和への取り組みについて発表します。そして、毎年 12 月頃に参加国から一人ずつ代表が選出され、各国持ち回りで開催される、平和式典を含めた、一週間の平和学習研修に参加します。次に、私が「日米豪平和プログラム」に参加した経緯についてお話しします。私がこのプログラムについて知ったのは高校 3 年生の夏休み前。一年間の留学を終え、これから受験準備に入ろうという時期に、当時英語での社会科の授業を教えてください、オーストラリア出身のアナ・パーカー先生から授業中にこのプログラムについてお話があり、日本の参加者が全くいないということを知り参加を決意しました。この時点では、既に他国の高校生は半年分の活動を終え、プロジェクトの終盤を迎えているところでした。私たちは一年分の活動を 4 ヶ月で仕上げなくてはならない上に、受験勉強と並行しなければならず、慣れない動画編集などで何度か心が折れそうになりながらも仲間と協力して作業を進めていき、無事に作品を完成することができました。そして、12 月に、私は日本代表としてハワイでの式典に参加し、他の参加国の代表とともに戦争と平和への理解を深めました。私がこのプログラムに参加して一番感じたこと、それは、いかに私たちが「戦争と平和」が身近な話題であると意識していないかということです。私もこのプログラムに参加する以前は戦争を身近なものとして捉えてはいませんでした。しかし、プログラムに参加する中で、私たちが今生きているのは戦争という辛い経験を乗り越えてきた先人たちがあってこそだということに気が付き、戦争ということが決して人ごとには思えなくなりました。それ以来、私はより深く戦争と平和について考えるようになり、実生活の中でも意識するようになりました。この意識こそが世の中を平和へと導く鍵となると、私は考えます。最近の日本では、よく「平和ボケ」と言われるように、人々の戦争や平和への意識が薄れているように感じます。その原因の一つとして考えられるのは、戦争や平和について考え、議論する機会の少なさです。日本人はあまり日常生活で戦争のような気難しい話題を出すことを嫌いますが、海外では普段の会話でそういった話題が出てきます。この差は日本と海外の教育の違いから生まれると考えます。日本では、歴史の授業で教科書を使い戦争について学びますが、その内容は特に「いつ、どこでそれが起きたのか」に注目されています。ただ、それではほとんど暗記のような一方的な学習であり自分の意見について述べる機会がありません。一方、海外では出来事の年号や場所を暗記するということはせずに、「なぜそれが起きたのか。今後そういったことを防ぐためにはどうしたら良いか。」といった議論を中心に授業を進めていきます。日本の歴史教育の場でも議論をする機会を与えることができれば、人々の戦争や平和への意識を変えることができると思います。また、このプログラムで私が学んだことの一つが、歴史上の問題について考える際に偏った視点を持つてはいけないということです。

歴史問題について考える際、私たちはどうしても日本国内の視点のみに着目してしまいます。しかし、そのままでは歴史を客観的に捉えることができず、本質にたどり着きません。大切なのは、様々な価値観を持った人同士で、多方面から歴史を見つめるということです。現在、世界で歴史の解釈の違いから国と国との関係が悪くなってしまっている状況が続いています。だからこそ、今の時代にはこの「日米豪平和プログラム」のような国境を超え、互いを理解しあう教育が重要になってくるのです。最後に、現在、戦争経験者の高齢化が進んでおり、今後、戦争経験者がいらっしやらないという状況になります。私たちに、戦争を経験した、していないに関わらず、戦争の愚かさを後世に伝え、平和な社会を構築する義務があると思います。また、平和とは必ずしも戦争がないという状態を指すものではありません。戦争がないとしても、虐待や差別などがある世界では平和であると感じることができないでしょう。だからこそ、世界の人々が身体的、精神的に平穏な状態になって初めて平和だと思えるのだと私は考えます。

